

少年の悲哀

國木田獨歩

青空文庫

少年こどもの歡喜よろこびが詩であるならば、少年の悲哀かなしみも亦また詩である。自然の心に宿る歡喜にして若もし歌ふべくんば、自然の心にさゝやく悲哀も亦また歌ふべきであらう。

兎とも角かく、僕は僕の少年の時の悲哀の一ツを語つて見やうと思ふのである。(と一人の男が話しだした。)

*

*

*

僕は八歳やっつの時から十五の時まで叔父うちの家で生育そだつたので、其頃、僕の父母は東京に居られたのである。

叔父の家は其土地の豪家で、山林田畑を澤山持つて、家に使ふ男女も常に七八人居たのである。

僕は僕の少年の時代を田舎で過ごさして呉れた父母の好意を感じ謝せざるを得ない、若し僕が八歳の時父母と共に東京に出て居たならば、僕の今日は餘程違つて居ただらうと思ふ。少くとも僕の智慧は今よりも進んで居た代りに僕の心はフーズフーズ一卷より高遠にして清新なる詩想を受用し得ることが出来なかつただらうと信ずる。

僕は野山を駈け暮らして、我幸福なる七年を送つた。叔父の家は丘の麓ふもとに在り、近郊には樹林多く、川あり泉あり池あり、そして程遠からぬ處せとうちに瀬戸内々海の入江がある。山にも野にも林にも

溪たににも海にも川にも僕は不自由を爲しなかつたのである。

處が十二の時と記憶する、徳二郎といふ下男が或日僕に今夜面白處つに伴れてゆくが行かぬかと誘さうた。

「何處どこだ」と僕は訊ねた。

「何處だと聞きかつしやるな。何處でも可ええじや御座んせんか、徳の伴れてゆく處に面白うない處はない」と徳二郎は微笑を帯びて言つた。

此徳二郎といふ男は其頃二十五歳位、屈強な若者で、叔父の家には十一二の年から使はれて居る孤みなしご兒である。色の淺黒い、輪廓の正しい立派な男、酒を飲めば必ず歌ふ、飲のまざるも亦また唄ひながら働くといふ至極元氣の可よい男であつた。常いっも樂しさうに見える

るばかりか、心こころ事ばせも至て正しいので孤兒には珍しいと叔父をはじめ土地の者皆に、感心せられて居たのである。

「然し叔父さんにも叔母さんにも内ないしよ證しょうですよ」と言つて、徳二郎は唄ひながら裏山に登つてしまつた。

頃は夏もなかの最中、月影鮮さやかなる夜であつた。僕は徳二郎の後あとについて田甫たんぽに出で、稻の香高き畔あぜみち路ぢを走つて川の堤つゝみに出た。堤は一段高く、此處に上れば廣々とした野面のづら一面を見渡されるのである。未だ宵ながら月は高く澄んで冴さえた光を野にも山にも漲ぎらし、野末には靄もやかゝりて夢の如く、林は煙をこめて浮ぶが如く、背の低い川かはやなぎ楊やなぎの葉末に置く露は珠のやうに輝いて居る。小川の末は間もなく入江、汐に満ちふくらんで居る。船板をつぎ合は

して懸けた橋の急に低くなつたやうに見ゆるのは水面の高くなつたので、川楊は半ば水に沈んで居る。

堤の上はそよ吹く風あれど、川面は漣かはづら さざなみだに立たず、澄み渡る大空の影を映して水の面は鏡のやう。徳二郎は堤を下り、橋の下に繋つないである小舟の纜もやひを解いて、ひらりと乗ると今まで静まりかへつて居た水面が俄にはかに波紋を起す。徳二郎は

「坊様早く早く！」と僕を促しながら櫓ろを立てた。

僕の飛び乗るが早いか、小舟は入江の方へと下りはじめた。

入江ちかづに近くにつれて川幅次第に廣く、月は川面に其清光を涵ひたし、左右の堤は次第に遠ざかり、顧かへりれば川上は既に靄かにかくれて、舟は何時しか入江に入つて居るのである。

廣々した湖のやうな此入江を横ぎる舟は僕等の小舟ばかり。徳二郎は平時の朗かな聲いつもほがらに引きかへ此夜は小聲で唄ひながら靜かに櫓を漕いで居る。潮の退た時は沼おちとも思はるゝ入江が高潮たかしほと月の光とでまるで様子が變り、僕には平時見慣れた泥臭い入江のやうな氣がしなかつた。南は山影暗く倒さかしまに映り北と東の平野は月光蒼茫として何れか陸、何れか水のけじめさへつかず、小舟は西の方を指して進むのである。

西は入江の口、水狭くして深く、陸迫りて高く、此處を港いかりに錨を下ろす船は數こそ少いが形は大きく大概是西洋形の帆前船ほまへせんで、出積荷は此濱で出来る食鹽、其外土地の者で朝鮮貿易に従事する者の持船も少なからず、内海を往來ゆきする和船もあり。兩岸の人家

低く高く、山に據り水に臨む其數數百戸。

入江の奥より望めば舷燈高くかゝりて星かとはかり、燈影低く映りて金蛇きんだの如く。寂漠たる山色月影の裡うちに浮んで恰あたかも畫のやうに見えるのである。

舟の進むにつれて此ちひさな港の聲が次第に聞えだした。僕は今此港の光景を詳細くはしく説くことは出来ないが、其夜僕の眼に映つて今日尚ほあり〜と思ひ浮べることの出来る丈を言ふと、夏の夜の月明らかな晩であるから船の者は甲板に出で家の者は戸外そとに出で、海にのぞむ窓は悉く開かれ、燈火ともしびは風にそよげども水面は油の如く、笛を吹く者あり、歌ふものあり、二三さみせん絃の音につれて笑ひどよめく聲は水に臨める青樓より起るなど、如何いかにも樂しき

うな花やかな有様であつたことで、然し同時に此花やかな一幅の畫圖を包む處の、寂寥たる月色山影水光を忘るゝことが出來ないのである。

帆前船の暗い影の下を潜り、徳二郎は舟を薄暗い石段の下に着けた。

「お上りなさい」と徳は僕を促した。堤の下で「お乗なさい」と言つたぎり彼は舟中僕に一語を交へなかつたから、僕は何の爲めに徳二郎が此處に自分を伴ふたのか少しも解らない、然し言ふまゝに舟を出た。

もやひつな
續を繋ぐや徳二郎も續いて石段に上り、先に立つてずん／＼登つて行く、其そのあと後から僕も無言で従つて登つた。石段は其幅半間よ

り狭く、兩方は高い壁である。石段を登りつめると或家の中庭らしい處へ出た。四方板塀で圍まれ隅に用水桶が置いてある、板塀の一方は見越みこしに夏蜜柑の木らしく暗く繁つたのが其頂いたゞきを出して居る、月の光はくつきりと地に印して寂せきとし人の氣勢けはひもない。徳二郎は一寸立ち止まつて聽耳を立てたやうであつたが、つかくと右なる方の板塀ちかつに近いちかつて向へ押すと此處は潜内くゞりになつて居て黒い戸が音もなく開いた。見ると戸に直ぐ接して梯子段はしごだんがある。戸が開くと同時に足音靜に梯子段を下りて來て、

「徳さんかえ？」と顔をのぞいたのは若い女であつた。

「待つたかね？」と徳二郎は女に言つて、更に僕の方を顧み、「坊様を連れて來たよ」と言ひ足した。

「坊様お上あがんなさいナ。早くお前さんも上つて下さい、此處でぐずぐずして居ると可いけないから」と女は徳二郎を促したので、徳二郎は早くも梯子段を登りはじめ、

「坊様暗う御座いますよ」と言つたぎり、女と共に登つて了しまつたから僕も爲しかた方なしに其後に従ついて暗い、狭い、急な梯子段を登つた。

何ぞ知らん此家は青樓の一で、今女に導かれて入つた座敷は海に臨んだ一室ひとま、欄らんに凭よれば港内は勿論入江の奥、野の末、さては西なる海の涯はてまでも見渡されるのである。然し坐敷は六疊敷の、疊も古び、見るからして餘り立派な室へやではなかつた。

「坊様、さア此處へ入いらつしやい」と女は言つて坐布團てすりを欄の下に

運び、なつだい夏 橙 そのほか其他の果物菓子などを僕にすゝめた。そして次の間を開けると酒肴の用意がしてある。それを運び込んで女と徳二郎は差向に坐つた。

徳二郎は平常ふだんにない懊むづかしい顔をして居たが、女のさす盃を受けて一呼吸ひといきに呑み干し、

「愈々いよく何日いつと決定きまつた？」と女の顔を熟ちつと見ながら訊ねた。女は十九か二十の年頃、色青ざめて左さも力なげなる様は病人ではないかと僕の疑つた位。

「明日あす、明後日あさつて、明々やのあさつて後日あさつて」と女は指を折つて、「明々やのあ後日あさつて」に決定きまつたの。然しね、私は今になつて又氣が迷つて來たのよ」と言ひつゝ、首を垂れて居たが、そつと袖で眼を拭つた様子。

其間に徳二郎は手酌で酒をグイグイ煽つて居た。

「今更如何と言つて爲方がないじやアないか。」

「それはさうだけれど——考へて見ると死んだはうが何程増しだか知れないと思つて。」

「ハツハツ、坊様、此姉様が死ぬと言ひますが如何しましようか。——オイオイ約束の坊様を連れて來たのだ、能く見て呉れないか。」

「先刻から見て居るのよ、成程能く似て居ると思つて感心して居るのよ。」と女は言つて笑を含んで熟と僕の顔を見て居る。

「誰に似て居るのだ。」と僕は驚いて訊ねた。

「私の弟にですよ、坊様を弟に似て居るなどともつたいない事だ

けれど、そら、これを御覽なさい。」と女は帯の間から一枚の寫眞を出して僕に見せた。

「坊様、此姉様が其寫眞を徳に見せましたから、これは宅の坊様と少しも變らんと言ひましたら是非連れて來て呉れと頼みますから今夜坊様を連れて來たのだから、澤山御馳走を爲て貰はんと可けませんぞ。」と徳二郎は言ひつゝも止め度なく飲んで居る。女は僕に摺寄つて、

「サア何でも御馳走しますとも、坊様何が可う御座いますか」と女は優しく言つて莞爾笑つた。

「何にもいらぬ」と僕は言つて横を向いた。

「それじや舟へ乗りましょう、私と舟へ乗りましょう、え、さう

爲ましよう。」と言つて先に立つて出て行くから僕も言ふまゝに女の後に従いて梯子段を下りた、徳二郎は唯だ笑つて見て居るばかり。

先の石段を下りるや若き女は先僕を乗らして後、纜を解いてひらりと飛び乗り、さも軽々と櫓を操りだした。少年ながらも僕は此女の舉動に驚いた。

岸を離れて見上げると徳二郎は欄に倚つて見下ろして居た。そして内よりは燈が射し、外よりは月の光を受けて彼の姿が明白と見える。

「氣をつけないと危難いぞ！」と、徳二郎は上から言つた。

「大丈夫！」と女は下から答へて「直ぐ歸るから待て居てお呉れ

」。

舟は暫時しばらく大船小船六七艘さうの間を縫ぬひて進んで居たが間もなく廣々とした沖合に出た。月は益々冴えて秋の夜かと思はれるばかり、女は漕手こくてを止とどめて僕の傍とびに坐つた。そして月を仰ぎ又四邊あたりを見廻はしながら、

「坊様、あなたはいくつ何歳？」と訊ねた。

「十二。」

「私の弟の寫眞も十二の時ですよ、今は十六……、さうだ十六だけれど十二の時に別れたぎり會はないのだから今でも坊様と同じやうな氣がするのですよ。」と言つて僕の顔を熟ちつと見て居たが忽ち涙ぐんだ。月の光を受けて其顔は猶なほ更さら蒼あをざめて見えた。

「死んだの？」

「否、^{いゝえ}死んだのなら却て斷念^{あきらめ}がつきますが別れた限、^{ぎり}如何なつたのか行方^{いきがた}が知れないのですよ。兩親^{ふたおや}に早く死別れて唯^たつた二人の姉弟^{きやうだい}ですから互に力にして居たのが今では別れ〜になつて生^{いき}死^しさへ分らんやうになりました。それに私も近い中朝鮮^つに伴^つれて行かれるのだから最早^も此世^うで會うことが出来るか出来ないか分りません。」と言つて涙が頬をつたうて流れるのを拭きもしないで僕の顔を見たまゝすゝり泣きに泣いた。

僕は陸の方を見ながら黙つて此話を聞いて居た。家々の燈火^{ともしび}は水に映つてきら〜と揺曳^{ゆら}いで居る。櫓の音をゆるやかに軋^{きし}らせながら大船の傳馬^{てんま}を漕^こいで行く男は澄んだ聲で船歌を流す。僕は

此時、少年心にも言ひ知れぬ悲哀を感じた。

忽ち小舟を飛ばして近いて來た者がある、徳二郎であつた。

「酒を持つて來た！」と徳は大聲で二三間先から言つた。

「嬉しいのねえ、今坊様に弟のことを話して泣いて居たの」と女の言ふ中徳二郎の小舟は傍に來た。

「ハツハツ、大おほかた概そんなことだらうと酒を持って來たのだ、

飲みなくわし私が歌つてやる！」と徳二郎は既に酔つて居るらしい。

女は徳二郎の渡した大コップに、満なみく々と酒をついで呼吸もつかずに飲んだ。

「も一ツ」と今度は徳二郎が注ついででやつたのを女は又もや一呼吸ひといきに飲み干して月に向て酒氣を吻ほっと吐いた。

「サアそれで可い、これから私が歌つて聞かせる。」

「イ、工徳さん、私は思切つて泣きたい、此處なら誰も見て居ないし聞えもしないから泣かして下さいな、思ひ切つて泣かして下さいな。」

「ハツハツ、そんなら泣きな、坊様と二人で聞くから」と徳二郎は僕を見て笑つた。

女は突伏して大泣に泣いた。さすがに聲は立て得ないから背を波打たして苦しさうであつた。徳二郎は急に眞面目な顔をしてこの有様を見て居たが、忽ち顔を背向け山の方を見て黙つて居る、僕は暫くして

「徳、最早歸らう」と言ふや女は急に頭を上げて

「御免なさいよ、眞實ほんとに坊様は私の泣くのを見て居てもつまりません。……私坊様が来て下さったので弟に會つたやうな氣が致しました。坊様も御達者で早く大きくなつて豪えらい方になるのですよ」とおろろ聲で言つて「徳さん眞實ほんとに餘り遅くなるとお宅うちに悪いから早く坊様を連れてお歸りよ、私は今泣いたので昨日きのふからくさくして居た胸がすいたやうだ。」

*

*

*

女は僕等の舟を送つて三四町も來たが、徳二郎に叱られて漕手こぐてを止めた、其中に二艘の小舟はだんく遠ざかつた。舟の別れん

とする時、女は僕に向て何時までも

「私の事を忘れんで居て下さいましナ」と繰返して言つた。

其後十七年の今日まで僕は此夜の光景を明白はつきりと憶おぼえて居て忘れやうとしても忘るゝことが出来ないのである。今も尚ほ憐れな女の顔が眼のさきにちらつく。そして其夜、淡うすい霞のやうに僕の心を包んだ一片の哀情かなしみは年と共に濃くなつて、今はたゞ其時の僕の心持を思ひ起してさへ堪え難い、深い、靜かな、やる瀬のない悲かなしみ哀あはれを覺えるのである。

其後徳二郎は僕の叔父の世話で立派な百姓になり今では二人の兒の父親になつて居る。

流ながれの女は朝鮮に流れ渡つて後、更に何處いづこの涯はてに漂泊して其果敢はか

ない生涯を送つて居るやら、それとも既に此世を辭して寧ろ靜肅むしなる死の國に赴おもむいたことやら、僕は無論知らないし徳二郎も知らんらしい。

(明治三十五年)

青空文庫情報

底本：「日本文學全集」 國木田獨歩「新潮社

1964（昭和39）年4月20日発行

入力：網迫

校正：丹羽倫子

1999年2月12日公開

2004年5月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

少年の悲哀

國木田獨歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>